

坂本龍馬  
中岡慎太郎

伊藤痴遊全集



伊藤忠遊全集

第十七卷

昭和五年九月十五日印刷  
昭和五年九月二十日發行

伊藤齋遊全集 第十七卷

(非賣品)

著者 伊藤仁太郎

發行者 下中彌三郎  
東京市麹町區下六番町一〇

印刷者 濤川 薫  
東京市麹町區下六番町一〇

發行所

東京市麹町區下六番町一〇  
櫻杏東京二九六三九番  
株式會社

平凡社

電話九段 三三一六  
四七六  
七五五  
番番番

# 第十七卷 坂本龍馬と中岡慎太郎 目次

總	說	三
文	久の頃	六七
山	内 容 堂	一四
吉	田東洋の死	一四
武	市 半 平 太	一五六
野	根山の壯舉	一八九
象	山と中岡	二〇五
容	堂と中岡	二二六
九	門の戦と中岡	二三〇
最	後の時勢論	二四七
坂	本と海援隊	二五一

海援隊の回顧	三二
薩長聯盟	三八
吉田屋と坂本	三四〇
檜崎お龍	三六六
天満屋の斬込	三九三
伊呂波丸事件	四〇二
新撰組の結城無二三	四〇七
中岡の日記	五一六
坂本關係文書	五四七
稿を終りて	五九九

坂本龍馬と中岡慎太郎



# 總說

## 一

明治維新の變革は、それ迄に起つた、幾多の變革に比べて、全くその形態から、内容までが、すべて異つて居た所に、頗る興味がある。

政權と、兵權の二つが、朝廷の手から離れて、武家の手に移つて以來、約六百年の歴史を、振返つてみると、其間に、幾度か、變革も行はれ、又、戰鬥の續いた事もあるが、其すべては、武家間の争ひであつた。時に、武家と、公卿の争ひになつた事もあるが、それは極めて稀な事であつた。

明治維新の變革を、それらの争鬪に、比べてみると、全く其本質を、異にして居る。以前のものは、すべてが、武家と武家の、權力争奪が、然らざれば、領地の争ひであつた。

然るに、明治維新の變革に至つては、領地の争奪戦でもなく、又、個々の權力争ひでもなく、それは實に皇室を中心としての争ひであつた。政權と兵權を、武家の手から、朝廷へ、取戻すべく、微力ながら、其點に觸れて、公卿も、動いて居たし、又、それを助ける武家が、幕府に向つて、對抗して行つたのだから、從來の争鬪とは、全然、其質を異にして居たのである。

其上に、西洋の文化が、日本の舊文化を壓して、茲に、新しい天地を、打開くべく、その機運も、動いて來たので



あるから、實に、武力の争ひ、といふばかりでなく、其處には、思想の上に於ける、新舊の、争ひも加はつて來たのである。

それであるから、従來、藩主の命令には、絶對服従の教育と、慣習に、全く囚れて居た、藩臣なるものが、時勢に處する態度に於て、容易に、藩主の命令にのみ、服従せぬ、といふ状態に、なつて來たので、各藩の間にも、今迄にない、空氣の動きは、現はれて來たのであつた。

戰國時代の歴史も、研究的に、見て行けば、可成り、面白いものではあるが、それと、全く異つた所に、一種の興味を、感じさせるものは、明治維新の變革である。

著者が、不圖した事から、明治維新の歴史に、興味を有つて、それを調べ始めてから、既に、三十五六年の星霜を経て居るが、調べて行けば、行く程に、興味が深くなつて來て、未だに、續けて居る譯であるが、最初に、之を思ひついて、始めた頃は、随分、苦心をしたものである。

其頃には、まだ、参考とすべき、書物も無く、その資料の如きは、殆んど、無かつた、といふても、よい位だ。維新史料局へ行けば、相當に資料もあるが、其代り、薩長に偏した事ばかりで、一般的の資料を、得る事は出來ず、生残りの、關係者を訪ねても、多くは、其語る所が、自分に都合のよい事ばかりになる、といふ傾きがあつた。

佐幕といふ、立場に在つた、各藩の間には、相當に、資料もある、と思ふが、之は、どういふ譯か知らぬが、絶對に、見せる事をしなかつた。

かうした事情の下に、著者の如き、淺學にして微力なものが、調べよう、とするのであるから、その困難は、一と通りでなかつた。

その時代に比べると、昨今は、非常に、都合がよくなつて、参考とすべき書物も多く、各藩の資料も、進んで提供してこれらから、研究の上に、少しの支障もない。

殊に、近年は、各方面の人々が、興味的に、之を調べ始めたから、いろ／＼な資料も出て来て、多くの中には、今迄の歴史を、全く書換へなければならぬ程の、有力な資料が、遠慮なく、提供されるやうになつて来た。

其代り、維新物といへば、一つの流行の如くなつて、小説、戯曲、演劇、映畫等、あらゆる方面に、進出して来て、其多くの中には、史實も、人物も、滅茶々に打壞されて、心ある人が見れば、深く嘆息するほど、非常にひどいものもあるが、それにしても、全く顧みられなかつた時に、比ぶれば、却て、頼母しい次第ではある。

## 一一

著者が、維新前後の事を、調べて居る間に、頗る興味を覚え、且、非常に感激した事がある。それは、あの頃の人物は、揃ひも揃つて、年齢の若い、といふ事であつた。

其次に、感激したのは、誰も彼も、すべて眞劍勝負であつた事だ。さうして、徹底する迄、突込んで行く所に、何ともいへぬ、強さの有つた事を、感じたのである。それだけの事を、知つただけでも、大いに興味を覺えたのである。

年の若い人が、活動するのであるから、元氣は、溢れるやうに有り、觸れる所の仕事は、すべて活々として、運ばれて行く。眞劍勝負のつもりで、掛かつて行くから、常に、棄身の形に、なつて居る。

武家天下、六百年の因襲から離れて、新しい天地を、打出す運動には、斯うした點がなければ、あのやうな運びには、ならなかつたらう、と思はれる。

西郷、木戸、大久保の三傑が、四十前後の壯時で、殆んど、生涯の事業を、透けて居る位で、維新當時に活動したものは、多く二十歳から、三十歳位であるから、その意氣の盛んなる事も、思はれる。最も若い者は、未丁年の人もあつた。

陸奥宗光の父が、紀州藩の嚴誦を蒙つて、和歌山の城下を、驅逐されて、戀野村へ、蟄居の身となつた時、宗光は、やうやく十一二歳であつた。而も、當時の彼は、此一事から、藩に對して、深き怨みを持ち、その復讐を考へたのだから、實に驚く。

嘉永二年に、薩摩の島津家に、内訌が起つた。それは、齊彬と久光の、相續争ひであるが、一時は、齊彬派の藩士が、齊興の怒りに觸れて、嚴罰を科せられた。

之が爲に、十數名の者は、切腹を申付けられたのであるが、其中に、高崎五郎右衛門といふ人があつた。其伴を、佐太郎というて、年僅かに十四歳であつた。父の罪が及んで、佐太郎も、遠島の申渡を受けた。

けれども、未だ元服前の少年であるから、今の言葉で云へば、執行猶豫といふ形で、島へ送られる事だけが、延びて居た。そのうちに、藩の内訌は治まり、齊彬の世となつたから、遠島處分は取消されたが、此佐太郎といふ少年が、後の正風である。

事件に對する關係が、どの程度迄であつたか、よく判らないが、兎に角、遠島處分を申渡されたのだから、單に、父に罪があつたから、といふだけの、輕い關係ではなからう。

土州に、吉村寅太郎といふ、傑物があつた。十一歳の時、庄屋を申付けられて居る。今の事にすれば、村長になつたのが十一歳、何と若い村長ではないか。此人は、後に、中山忠光を奉じて、大和五條の地に、攘夷討幕の狼火を揚げた一人である。

長州の高杉晋作が、幕府の征長軍に對抗すべく、長州藩の海陸總督になつたのが、二十七歳の時であつた。同藩の久阪玄瑞が、高杉と雁行して、松陰門下の二俊といはれたのが、二十一二歳の時であつた。

福井藩の橋本左内が、啓發録を書いて、天下の識者を驚かしたのは、十四歳の時で、安政の疑獄に引つかゝり、傳馬町の牢内で、井伊大老の暴政に依つて、斬首されたのは、二十六歳の時であつた。

かういふ具合に、數へ來れば、いづれも、少壯の人ばかりだ。其時分の間も、昨今の人間も、人間といふ事に、變りはなからうが、性根玉の置所が、ちがつて居るから、其價值を比ぶれば、殆んど、比較にならぬ程の差がある。さうした時代の隋勢とでもいふべきか、明治になつてからも、十年頃までは、それと同じやうに、まだ、青年の間から、偉い者が、飛出して居る。

今の樞密院顧問官、伊東巳代治が、兵庫大阪へラルド、新聞の記者になり、翻譯主任として、二十五兩の俸給を、取つて居たのは、年僅かに、十四歳の時であつた。

同じく、樞密院に居る、田健治郎が、伊勢伊賀二州に跨つて、地租問題から、未曾有の焼打事件が起つた時、安濃津裁判所の札問判事として、百二萬七千人の被告人を扱ひ、同僚數名と共に、此大疑獄の處理を、巧みにしたのは、二十歳の時であつた。

星亨が、横濱の税關長になつたのは、二十四歳の時であるが、大阪の何禮之の塾に、英語の教頭をしたのは十九歳。さらに、紀州藩の大學校に、校長の役目を、勤めたのが、同じ歳の事であつた。

其他にも、それと同じやうな例は、澤山に在るが、そんな事を、並べ立てたら、一冊の書物を成す位であるから、大概にして置くが、兎に角、昔の人は、偉かつた、と言つても、苦情の起る事はなからう。

## 二二

すべての場合に、捨身で、眞劍味をもつて居たから、死生の如きは、眼中にない。維新志士の強みは、其點に在つたのだ。もう一つ、偉い事は、あの頃の人物は、皆、己を空しにする事を、知つて居た。

己を空しにするから、功名心はあつても、それが爲めに、汚ない争ひはせぬ。目的のためには、榮達を眼中に置かぬから、徒らに功名を、貪る事をしない。従つて、蔭身になつて、人に功名を譲るだけの、雅量を持つて居た。

これではなければ、天下の大仕事は、出来るものでない。昨今の人間のやうに、人を押退けて、我利賣名のためにのみ、動くのとは、非常な相違がある。

全體、人間といふものは、誰にしても、己惚れはあるものだが、己れの足らざる事を、知る者でなければ、大事に當る事は出来ぬ。己れの足らざる事を知るから、人に譲る事も、出来る譯だ。

これを薩摩の二傑に就ていへば、大久保と西郷の關係が、即ちそれであつた。

大久保の智慧と、その膽力は、敢て西郷に、譲らなかつたけれど、何處迄も、西郷を表面に立て、自分は、薩の  
人となり、久光の急所を握つて、西郷の働きをして、容易ならしめた、といふ點に、大久保の偉さが、現はれて居る。

土州の坂本龍馬と、中岡慎太郎が、矢張り、それと同じ關係であつた。

中岡は、常に、坂本を表面に立て、背後から、押して行く形になつて居た。坂本は、それを、よく知つて居て、中岡を逃がさぬやうに、しつかり、其手を握つて居ただから、面白い。

此一小冊子に依つて、坂本、中岡の、兩雄に關するすべてを、盡し得る事の出来ないのは、よく判つて居るが、兎に角、兩雄のすぐれて居た點だけは、傳へて見たい、と思ふ。

さればとて、著者は、茲に、兩雄の優劣を言はう、とするのではない。尤も、公平に視て、優劣をつける程の差は、なかつたのである。互ひに一長一短、同じ型の人で、同じ力量を持つて居た。人物とするのが、至當であらう。それから先は、各自の好き嫌ひから、點取りは、違つて行くであらうが、好き嫌ひは、人物を視る上に、何等の、重きを爲すものでもなく、却つて、批評の正鵠を、誤る場合が多い。

只茲に一つ、遺憾に堪へぬ事がある。

それは、外の事でもないが、世間には、坂本の名ばかりが、特に高く響いて、從來、中岡の事は、殆んど、忘れられて居るのだ。どうして、斯ういふ事になつたか。それは、よく判らぬが、坂本の爲には、幸ひであるとしても、中

岡の爲めには、洵に、氣の毒千萬である。

著者が、坂本の名を知つたのは、子供の頃からであるが、その爲人の一斑を知るやうになつたのは、青年時代に、なつてからだ。

明治二十年前後と思ふが、著者等の先輩に、土州人て、坂崎斌といふ人があつた。漢學の造詣が深く、漢詩文に長じて居た。詩人としては、紫瀾の雅號で、その名高く、殊には、器用な人であつたから、小説化した俗文も、實に、上手なものであつた。

明治十七年の頃、築地の新榮町に、有一館と稱する、自由黨所屬の私塾があつた。著者も、其所へは、よく通つたものであるが、坂崎の漢籍講義を聞いて、頗る其人に、傾倒したのであつた。

演説をすると、滑稽諧謔、臍の皮をよらせるやうな事をいうて、よく聽者を笑はせたものだ。さうした素質が、有るからでもあつたらうが、後には、政治思想の普及を、計るために、又、一面には、當時の政府が、言論に壓迫を加へたのに對して、抗爭する意味から、馬鹿林鈍翁といふ、變名を使つて、落語家になつた事もある。

一時は、社會主義者として、名を知られた影山英子、即ち、後の福田英子が、妙齡の婦人の身を以て、郷里の岡山から出て来て、坂崎の塾生になつたのも、其頃の事である。

其時代に、坂崎が、鳴鳴道人といふ名で、汗血千里駒といふ小説を、著した事がある。小説と、銘は打つてあつても、實は、坂本の傳記であつた。形容して云へば、洛陽の紙價を、高からしめた程に、よく賣れた小説であるが、著者は、之に依つて、坂本の事を、よく知る事が出来て、それから後も、坂崎からは、坂本の事を、屢々聞かされたものである。

それが、先入主となつて、土州には、坂本の他に、偉い人物は無いやうに、思つた時代もある。だん／＼、探求慾も、出て来て、維新の事蹟を、調べるやうになり、それから、坂本の事を、詳しく知り度い、といふ考へから、土州

藩の事情を、調べ始めたのだ。

所が、土州藩には、坂本ばかりでなく、それに劣らぬ傑物も、居た事を、知り得たのである。いよく深入りして、調べて見れば、そこに、武市半平太も、現れて来るし、吉田東洋の事も、判つて来る。武市を調べれば、中岡慎太郎の名が、現はれて来る。又、吉村寅太郎、間崎滄浪、平井收二郎等の人が、著者の頭へ、頻りに映つて来るのであつた。

殊に、中岡は、坂本と共に、薩長の聯合を策し、其力に依つて、徳川に、大政奉還を爲さしめようとして、非常な働きをした人であつたが、坂本と同時に、兎徒の刃にかゝつて、同じ處に仆れた、といふ事は、最も印象深く、著者をして、忘れる事の出来ぬやうに、して了つたのだ。

それから、中岡の事蹟を、調べ始めて見ると、坂本に譲らざる、傑物である、といふ事が、判つて来た。それが、著者に、中岡熱の高くなつて来た経路である。

#### 四

中岡は、最初、三藩聯合を、考へて居たのだ。即ち、薩長土の三藩を、うまく取扱つて、聯盟の形とし、薩長二藩を、正面に拮立て、土州藩は、更に潮合をみてから、乗出すべく、洵に都合のよい、立場を作らう、として、非常に苦心したのであるが、どうしても、それが出来ぬ、となつてから、薩長二藩の聯盟に、力を盡す事になつたのである。

中岡は、坂本と、同じ道を、歩むやうになつたが、その初めは、武市配下の一人として、強烈な攘夷對幕論者であつた。その目的のために、三藩聯合を策したのだが、藩主の豊範は、暫く措いて、隱居の容堂、即ち豊信が、祖先一豊以來の、徳川との因縁から、容易に腰が切れず、殊に、吉田東洋といふ傑物が、容堂の側近に居て、公武合體論を、

支<sup>し</sup>持<sup>ち</sup>して居<sup>ゐ</sup>た爲<sup>ため</sup>めに、容<sup>よう</sup>堂<sup>どう</sup>も、その心<sup>こころ</sup>になつて居<sup>ゐ</sup>たので、之<sup>これ</sup>を動<sup>うご</sup>かす事は、如何<sup>いかに</sup>に中<sup>なか</sup>岡<sup>おか</sup>でも、容<sup>よう</sup>易<sup>い</sup>な事<sup>こと</sup>でなかつた。尤<sup>もつと</sup>も、坂<sup>さか</sup>本<sup>もと</sup>とちがつて、中<sup>なか</sup>岡<sup>おか</sup>は、容<sup>よう</sup>堂<sup>どう</sup>の信<sup>しん</sup>任<sup>にん</sup>は、得<sup>え</sup>て居<sup>ゐ</sup>たから、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>にも、多<sup>た</sup>少<sup>せう</sup>の頼<sup>たの</sup>む所<sup>ところ</sup>は、在<sup>あ</sup>つたらうが、容<sup>よう</sup>堂<sup>どう</sup>の侍<sup>じ</sup>講<sup>かう</sup>として、時<sup>とき</sup>には、容<sup>よう</sup>堂<sup>どう</sup>から、先<sup>せん</sup>生<sup>せい</sup>と呼ば<sup>よ</sup>ばれて居<sup>ゐ</sup>た程<sup>ほど</sup>の、東<sup>とう</sup>洋<sup>やう</sup>を押<sup>お</sup>退<sup>し</sup>けて、容<sup>よう</sup>堂<sup>どう</sup>を説<sup>と</sup>付<sup>け</sup>ける、といふ程<sup>ほど</sup>の、身<sup>み</sup>分<sup>ぶん</sup>ではなかつた。

坂<sup>さか</sup>本<sup>もと</sup>は、早<sup>はや</sup>く脱<sup>だつ</sup>藩<sup>はん</sup>して了<sup>しま</sup>つたが、中<sup>なか</sup>岡<sup>おか</sup>は、容<sup>よう</sup>堂<sup>どう</sup>の鑑<sup>かん</sup>識<sup>し</sup>になつて、今<sup>いま</sup>ていふ國<sup>こく</sup>際<sup>さい</sup>探<sup>たん</sup>偵<sup>てい</sup>、といふやうな、重<sup>おも</sup>い役<sup>やく</sup>目<sup>め</sup>を授<sup>あづ</sup>けられて居<sup>ゐ</sup>たから、假<sup>かり</sup>に、三<sup>さん</sup>藩<sup>はん</sup>聯<sup>れん</sup>合<sup>が</sup>、うまく行<sup>ゆ</sup>かぬとしても、中<sup>なか</sup>岡<sup>おか</sup>には、相<sup>あ</sup>當<sup>たう</sup>、立<sup>た</sup>働<sup>はたら</sup>くべき餘<sup>よ</sup>地<sup>ち</sup>は、猶<sup>なほ</sup>存<sup>ぞん</sup>して居<sup>ゐ</sup>たのだ。

坂<sup>さか</sup>本<sup>もと</sup>が、早<sup>はや</sup>く長<sup>ちやう</sup>州<sup>しゅう</sup>に眼<sup>め</sup>をつけて、高<sup>たか</sup>杉<sup>すぎ</sup>と結<sup>むす</sup>んだ如<sup>ごと</sup>く、中<sup>なか</sup>岡<sup>おか</sup>も亦<sup>また</sup>、長<sup>ちやう</sup>州<sup>しゅう</sup>に眼<sup>め</sup>をつけて、久<sup>く</sup>坂<sup>さか</sup>と結<sup>むす</sup>んだ。此<sup>この</sup>二<sup>に</sup>つ<sup>つ</sup>の力<sup>ちから</sup>が、やがて薩<sup>さつ</sup>長<sup>ちやう</sup>の聯<sup>れん</sup>盟<sup>めい</sup>を容<sup>よう</sup>易<sup>い</sup>ならしめたのであつた。

前<sup>まへ</sup>にも、云<sup>い</sup>うた如<sup>ごと</sup>く、いよく薩<sup>さつ</sup>長<sup>ちやう</sup>聯<sup>れん</sup>盟<sup>めい</sup>と定<sup>さだ</sup>めて、兩<sup>りやう</sup>雄<sup>ゆう</sup>の關<sup>かん</sup>係<sup>けい</sup>が、いよく密<sup>みつ</sup>接<sup>せつ</sup>になつて行<sup>ゆ</sup>くに從<sup>したが</sup>ひ、その働<sup>はたら</sup>きは、益<sup>ます</sup>々<sup>々</sup>眞<sup>しん</sup>劍<sup>けん</sup>味<sup>み</sup>をもつて、來<sup>き</sup>たのである。

京<sup>きやう</sup>都<sup>と</sup>の戰<sup>せん</sup>ひに、中<sup>なか</sup>岡<sup>おか</sup>が、長<sup>ちやう</sup>州<sup>しゅう</sup>兵<sup>へい</sup>を援<sup>えん</sup>けて、幕<sup>まく</sup>軍<sup>ぐん</sup>と戰<sup>たたか</sup>つた事<sup>こと</sup>と、その翌<sup>よく</sup>年<sup>ねん</sup>に、坂<sup>さか</sup>本<sup>もと</sup>が、高<sup>たか</sup>杉<sup>すぎ</sup>の代<sup>か</sup>りに、長<sup>ちやう</sup>藩<sup>はん</sup>の軍<sup>ぐん</sup>體<sup>たい</sup>に乗<sup>の</sup>つて、幕<sup>まく</sup>府<sup>ふ</sup>の軍<sup>ぐん</sup>體<sup>たい</sup>を、散<sup>さん</sup>々に、打<sup>うち</sup>負<sup>ま</sup>かした事<sup>こと</sup>と、此<sup>この</sup>二<sup>に</sup>つ<sup>つ</sup>は、長<sup>ちやう</sup>州<sup>しゅう</sup>人<sup>じん</sup>に對<sup>たい</sup>して、よほど好<sup>かう</sup>感<sup>かん</sup>を、持<sup>も</sup>たせたに、違<sup>ちが</sup>ひない。

薩<sup>さつ</sup>長<sup>ちやう</sup>の聯<sup>れん</sup>盟<sup>めい</sup>が成<sup>な</sup>れば、大<sup>たい</sup>勢<sup>せい</sup>に、著<sup>しる</sup>しい變<sup>へん</sup>化<sup>か</sup>を起<sup>おこ</sup>して、それ爲<sup>ため</sup>めに、倒<sup>たひ</sup>幕<sup>まく</sup>の目<sup>め</sup>的<sup>てき</sup>も達<sup>た</sup>すれば、亦<sup>また</sup>、朝<sup>あ</sup>廷<sup>てい</sup>へ、政<sup>せい</sup>權<sup>けん</sup>と兵<sup>へい</sup>權<sup>けん</sup>を、取<sup>と</sup>戻<sup>も</sup>す事<sup>こと</sup>も出<sup>で</sup>来る、と考<sup>かんが</sup>へたればこそ、それ迄<sup>まで</sup>の眞<sup>しん</sup>劍<sup>けん</sup>味<sup>み</sup>を持<sup>も</sup>つたのであらうが、兎<sup>と</sup>に角<sup>かく</sup>、實<sup>じつ</sup>戰<sup>せん</sup>の手<sup>て</sup>傳<sup>でん</sup>までする、といふに至<sup>いた</sup>つては、普<sup>ふ</sup>通<sup>つう</sup>の人物<sup>じんぶつ</sup>に、容<sup>よう</sup>易<sup>い</sup>に爲<sup>な</sup>し得<sup>え</sup>ざる所<sup>ところ</sup>である。

兩<sup>りやう</sup>雄<sup>ゆう</sup>は、かうした膽<sup>たん</sup>略<sup>りやく</sup>の、持<sup>も</sup>主<sup>しゅ</sup>であつたと同<sup>どう</sup>時に、時<sup>とき</sup>勢<sup>せい</sup>に對<sup>たい</sup>する、智<sup>ち</sup>慧<sup>ゑ</sup>の閃<sup>ひら</sup>きは、實<sup>じつ</sup>に鋭<sup>えい</sup>いものであつた。いづれにしても、大<sup>だい</sup>した學<sup>がく</sup>問<sup>もん</sup>を、した譯<sup>わけ</sup>でもなからうが、その識<sup>し</sup>見<sup>けん</sup>の高<sup>たか</sup>かつた事<sup>こと</sup>は、驚<sup>おど</sup>くべきものがある。



坂本には、船中入策なるものがあつて、之は、世間に、有名な事ではあるが、坂本の見識を、證據立てる爲めには、紹介しておく必要がある。

坂本が、長崎に移つて、既に、海援隊をつくつて居た當時、濶用を帯びて、後藤長輔が、國から出て來た。

武市が、獄中で切腹した時、後藤は、奉行を勤めて居た。無論、武市一派の訊問は、後藤の手によつて、爲されたのであるから、従つて、武市を殺したものは、後藤である、といふ感情は、武市派の人々が、持つて居たのだ。海援隊には、武市派のものが、多く居たから、後藤の出て來たのを幸ひに、之を襲うて、斬つて了へ、といふ議論が、却々に盛んであつた。

それを抑へつけたのが、坂本である。武士の意地からいへば、後藤を斬る、といふ説も成立つが、今は、さうした小さい事を、争うて居る場合でない、といふ意見であつたのだ。殊に、海援隊を組織した目的は、志、海外に在つて、今後、世界へ乗出して、大きい仕事をすると、いふのであつた。

此點が、坂本の優れて居た所で、坂本は、一同の逸り立つのを、抑付けて、却て、後藤を利用しよう、と考へたのだ。

それには、佐々木三四郎と、岩崎彌太郎も、關係を持つて居たのだ。佐々木と岩崎が、坂本の意中を、何處まで汲み取つて居たかは明かでないが、兎に角、後藤と坂本を、喰ひ合はせて了つては、藩の不利、此上なしと見て兩者の調停を計つたのは、事實だ。

かうした事情から、後藤が、坂本に會つた時、坂本は、諄々として、世界の大勢を説き、日本の立場を論じたものだ。後藤は、ひどく其説に動かされて、堅く坂本の手を握り、これからは、同じ道を行くべく、深い約束をしたのである。

慶應三年、六月二十日、夕顔丸といふ船に乗つて、後藤と共に、坂本は、土佐へ歸る事になつた。